ライティング＆リサーチコンサルタントの実践と現在

天笠　邦一（あまがさ　くにかず）
（ライティング＆リサーチコンサルタント）
直江　健介（なおえ　けんすけ）
（ライティング＆リサーチコンサルタント）
笠井　賢紀（かさい　よしのり）
（ライティングコンサルタント　2012年３月まで，現・龍谷大学専任講師）

1　ライティング＆リサーチコンサルタントとは

ライティング＆リサーチコンサルタント（以下，WRC）は，学生のレポートや論文の執筆に関する悩みを気軽に相談出来る湘南藤沢メディアセンターの常設の窓口として，準備期間を経て2011年７月より試験運用が行われてきた。その試験運用期間中の実績を元に，2012年４月より本格的な実施に移っている。

本稿では，WRCの実施概要を紹介するとともに，試験運用開始から，約１年に及ぶ経験の中で得られた学生たちの学習のあり方に対する知見と，今後のWRCの可能性についてまとめてみたい。

2　WRCの運営体制

現在，WRCは，３名のコンサルタントによって運営している。コンサルタントは，後期博士課程の学生かポストドクター研究員であり，学術的な素養に加えて，学生との心理的距離の近さを重視した人選となっている。相談窓口は湘南藤沢メディアセンター２階にある，イベントスペース内に設置し，火曜日から金曜日までの午後の時間帯を中心に，学生が飛び込みで相談が可能な体制を整えている。（ホームページ[1]も用意しており，こちらも参照されたい。）

3　発足，正式運用までの道のり

湘南藤沢メディアセンターの伝統的なサービスとして，学生コンサルタントというものがある。現在，CNSコンサルタント，AVコンサルタント，DBコンサルタントが存在し，それぞれサービス分野のサポート業務を行ってきたが，メディアセンターとしては新たにライティング支援を加えたいと考え，2010年11月からサービス発足に向けて準備を開始した。2011年４月からはコンサルタント候補のメンバーとレファレンス担当職員との間で運用方法について多くの相談を重ねた。仮運用前には教員にもアンケートをとり，どの程度コンサルタントを活用していただけるか，どのような指導をすればよいのか，といった点についても確認した。

検討の結果，学生のレポート作成や論文執筆の過程で生じるテクニカルな悩みなどに絞ってコンサルティングを行うというスタンスで業務を開始することにした。このように相談の対象とする範囲を絞ったのは３名のコンサルタントの専門領域が異なることが一因となっている。また，上述した教員アンケート結果で内容に踏み込む以前の指導までとして欲しいという要望もあったため，コンサルタントは一般的な論文の構成，文章の書き方，情報の集め方などについて相談に応じるというスタイルとなった。

実際に仮運用を始めると，論文の構成や文章の書き方に加えて，論文執筆をすることを前提とした研究の進め方，論文のテーマ設定が主な相談内容であった。中には研究内容に踏み込まざるを得ない相談も多くあった。具体的な分析手法や方法論など学問分野によって大きく異なる部分は別として，研究への取り組み方やその思考プロセスなどのエッセンスについては分野を問わず共通する部分が多いのも事実である。このようなことから，基礎的な研究アプローチや考え方についてもコンサルティング範囲に含めることとした。本運用を開始した2012年４月からわたしたちライティングコンサルタントは，正式名称をライティング＆リサーチコンサルタントと改めた。

4　現在までの利用状況

運用を開始するにあたり，ウェブサイト以外にもTwitterアカウント[2]を開設し，相談の窓口をいくつ

か用意してきた。しかし，どの曜日や時間帯，あるいはどの学部，学年に相談者が多いのかが見当がつかなかった。これについては実際の仮運用期間中に，傾向を把握する必要があった。

そこで，問診票という，いわば診断カルテのようなものを準備した。この問診票は仮運用時から現在に至るまで利用し続けているため，利用者の傾向をつかむには良い統計情報となっている。利用者数はまだまだ少ないものの，その中から読み取れる利用状況をいくつか紹介したい。（なお，この統計情報は2012年5月までのものである。）

仮運用開始以降，WRC窓口の利用者は延べ94名であった。その変動が図1である。また，時間帯別利用者数については図2にまとめた。（時間帯別利用者数については2011年7月の途中から記録をとり始めたため，月別利用者数との合計が異なる。）窓口利用者の学部・大学院別の内訳は図3の通りである。さらに，相談対象（複数回答可）については図4の通りであった。相談内容を分野別に見たものが図5である（複数回答可）。加えて，細かい相談事項（複数回答可）の内訳を図6にまとめた。

このような統計情報から，学期初めに窓口の利用が集中している事が分かった。この状況は特に新入生に多く見られ，大学に入って初めてレポート課題へ取り組む際に窓口を利用していた。逆に高学年の学生はレポート・論文の締め切り直前に窓口に駆け込むようであった。窓口を利用する時間帯については授業の合間，特に昼休み後の時間帯と5限後の時間帯に利用が集中しているのが読み取れる。利用者は基本的に授業を優先し，授業のある日の空いた時間に利用する傾向にあった。反対に湘南藤沢キャンパス（以下，SFC）で授業が少ない水曜日などは窓口利用率が大きく下がっていた。

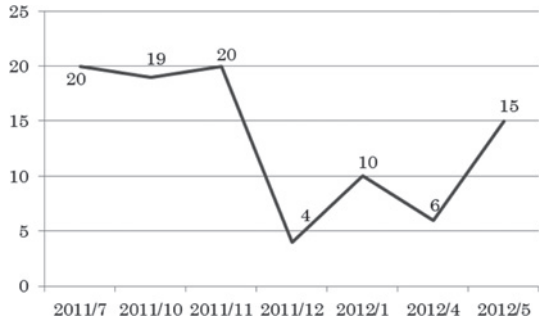

図1.　月別1日当りの利用者数（人）

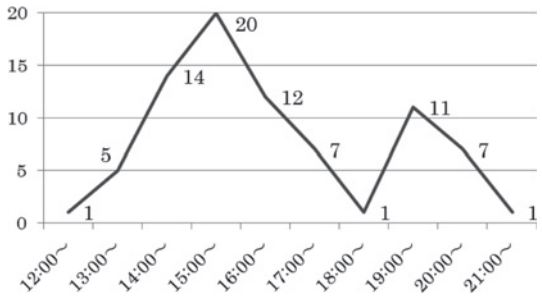

図2.　時間帯別利用者数（人）

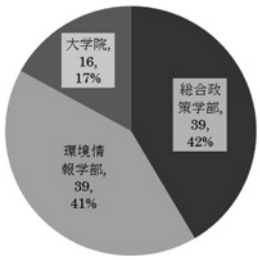

図3.　利用者所属内訳

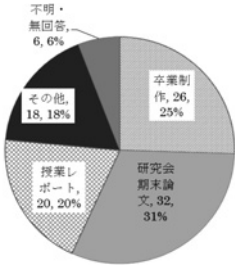

図4.　相談対象内訳

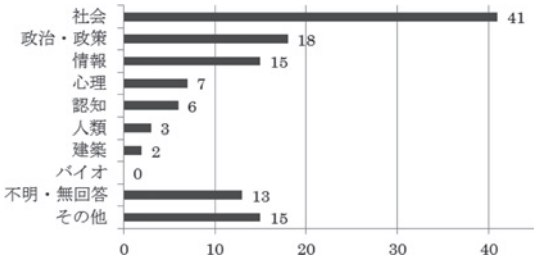

図5.　分野別相談内容（人）

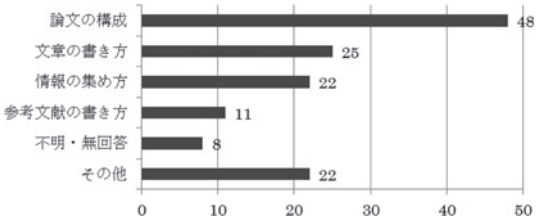

図6.　相談事項内訳（人）

5　実践を通して感じた問題意識

ここまでは，WRCが設立された背景と，これまでの運用の経緯について紹介をしてきた。本章では，各コンサルタントが，コンサルティングの実践を通して感じた，WRCの今後に対するヴィジョンや問題意識について述べる。

(1) WRC 利用者の分野とその性質（直江）

WRC のコンサルタントメンバーは各自が異なる専門分野を持っているため，広報用のポスターやウェブサイトにそれぞれの専門分野を載せている。これは，利用者が専門的な中身に踏み込んだ形でのアドバイスが欲しい場合は，事前に確認してから相談に来てもらいたいということである。

SFC は学部，研究科を問わず，分野を横断的にまたぐような領域を研究対象とする学生が少なくない。そのため，コンサルタントは特定の分野に限ったアドバイスをするのではなく，ある程度柔軟に一般的な話に広げながら相談に応じる必要がある。

しかし，運用開始後ある傾向に気づくこととなる。それは，相談内容の分野が社会学，政治学，経済学，経営学などのいわゆる総合政策分野に属するものが多いことである。一方で情報系の内容の質問はそれらと比べると非常に少ない。また，総合政策学部的学問領域を研究テーマにする学生ほど，研究プロジェクトでの研究の進め方や論文の仕上げ方，研究テーマの選定についての相談が多い。これはいったいどういうことであろうか？

ひとつ考えられることとして，SFC の情報技術系の研究プロジェクトは情報系という広い分野の中である程度専門性を帯びた研究領域を持っているため，情報技術系の研究プロジェクトに所属する学生は，その研究プロジェクトを選択した時点で，研究の方向性がある程度絞れていることが考えられる。そのため，テーマ選定の段階の悩みはクリアしており，それら学生が抱えている悩みとは専門領域の内容に踏み込んだ悩み，つまり，研究プロジェクト内で解決しないといけないものとなっており，WRC を利用するに至らないという可能性である。一方，総合政策学部系の領域においては，たとえある特定の学問領域のテーマであっても，その本質が多岐の学問領域にまたがっているテーマであることが多く，同じ研究プロジェクトに所属する学生間でも共通した研究スキームを形成しにくい。つまり，一つの専門分野だけでは解決できない，あるいは，結論を導き出せない複合的な学問要素を有する困難なテーマ設定をしていることが多いのである。学問領域によって，研究論文の書式や研究スタイルには異なった慣習・慣例があり，研究プロジェクト内においても，先輩方の研究スキームをそのまま踏襲するのが困難なケースが多いのではないかと考える。ある意味で，SFC ならではの研究遂行上の悩みを抱えているといえよう。

(2) 潜在的な利用者へのアピール（笠井）

ライティングとリサーチは切っても切れない関係にある。ライティングは，リサーチのアウトプットであり，成果を公や教員に示す行為だ。忽然とアウトプットが現れるわけはなく，当然，リサーチによるインプットが必要になる。アウトプットへの反響を踏まえて新たなインプットが始まり，徐々にアウトプットの質が高まっていくので，ライティングとリサーチの往復運動が肝要である。

以上のような説明には説得力がある。だが，こうしたたとえはライティングを単なるアウトプットとして矮小化するきらいがある。ライティングは，論文の構成を考えることに始まり，様式に則りながら，読者・評価者へ説得的かつ論理的な文章を作り上げることである。

そして多くの場合，執筆者はこの過程で疑問や不安を抱く。自分が調べて考えてきたことが思うように文章化できないからだ。そこで，構成術や修辞法を本で学んだり相談したりするわけだが，そのようにして解決できる問題は思うより少ない。なぜなら，思うように書けない原因は，構成や修辞ではなく内容そのものにあることが多いからだ。研究・学習の過程でいかに慎重に情報収集し考察・分析を重ねても，一度アウトプットしてみなければ，自分の考えにある論理破綻や不足点にはなかなか気づけない。

WRC の利用者も，「うまく書けない」，「書き出してみたが自分の思っていたようにならない」という悩みを抱える方は少なくなかった。だが，そのことを問題と捉えるのではなく，まさにうまく書けないという気づきこそがライティングの効用であると肯定的に捉えてほしい。

WRC 窓口にて相談するときには，ライティングだけではなく，コンサルタントに「相談」するという一種のオーラル・プレゼンテーションも必要になる。人に説明するという行為は，相手にとって矛盾なくわかりやすいように行わなければならないから，これも自分の研究・学習内容に問題がないかどうか確認するのに極めて有効な手段である。さらに，その過程で気づくことができるのは不足している点や誤りだけではない。自分の研究・学習の独創性や

強みも見えてくる。

WRCを「ライティングの技巧を教えてくれるところ」や「悩んだときにいくところ」と考えている潜在的な利用者に，執筆・相談過程で得られるこうした広い効果を知っていただくことが重要ではないだろうか。

(3) WRCのポジショニングと今後の可能性（天笠）

SFCにおける教育は,「研究プロジェクト」を中心に構成されている。「プロジェクト」とは，担当教員が提示したテーマや課題に参加学生が協力して取り組む，一般的な大学においては「ゼミナール」に相当するグループである。

これまでSFCでは，論文・研究の指導は，この「研究プロジェクト」を通して，担当教官が一義的な責任を負い，実施することを想定してきた。また，講義科目としても,論文執筆の要点を学ぶ「ライティング技法ワークショップ」「アカデミックライティング」や文献等の検索法を扱う「資料検索法」等が用意され,基本的な学術的スキルを学ぶことが出来る。

一見すると，これらのプロジェクトや講義とWRCの機能は競合しているように見える。では，WRCの適切なポジションは，どこにあるのだろうか。

WRCは,決して,上述したプロジェクト中心の指導体制そのものに異を唱える訳ではない。むしろ，分野が幅広く,更に実践を重視するSFCの教育において，このプロジェクト単位の教育は，専門性と実践のフィールドを担保する上では必要不可欠なものだと考えている。「アカデミックライティング」や「資料検索法」等，学術的スキルを学ぶ授業も，知識を体系的に学ぶのに必要不可欠だ。

このような体制があってなお，WRCに存在の意義があると考え，実践を続けている背景には，一つの問題意識が存在する。それは「知識へのアクセシビリティ」の問題である。

SFCは，個人の問題発見・問題意識を重視する教育機関である。そんな問題意識を持った学生でもプロジェクトに加入した当初は，その問題意識を担当教官に伝えられないと感じている学生がいるようだ。

そもそもプロジェクトに1,2年次から加入できるSFCにおいては，教員と学生の間の知識の非対称性が，他大学と比べて大きくなる可能性が高い。興味深い問題意識を持っていても，それを担当教員に適切に伝えるのには，多くの場合，障壁が存在する。更にこれまで「縦の関係」をあまり経験してこなかった学生たちには，社会的地位や年齢が大きく異なる指導教官とのやりとりに不安を感じる学生が多いようだ。実際，WRCに訪れた学生の中にも「指導教員と何を相談して良いかすら，わからない」「いきなり指導教員のもとへ行くのは抵抗がある」と言う学生が，少なからずいた。

学術的スキルの講義に関しても，内容が素晴らしくとも,制度上のアクセシビリティは万全ではない。必修でないため，その必要性が多くの学生には理解しがたく，履修に至らない。こうした現状を考えると，学生が必要だと思ったときに，学生に近い立場から手を差し伸べ，その必要性を理解させ，履修への架け橋となるような存在が必要である。

WRCの表面的な業務は，論文・レポートのフォーマットの指導や添削であり，これは今後も継続すべきであろう。一方で，常に指導教員や該当講義への架け橋としての役割も意識しながら，コンサルタントとしての可能性を探るべきだと考えている。

6　今後に向けて

WRCは，まだ産声を上げたばかりである。認知も進まず，利用者も決して多いとは言えない現状である。それでもコンサルタントたちは，利用者とのコミュニケーションの中で，確かな手応えを感じながらコンサルティングを行っている。

今後は，コンサルタントの中でも議論を尽くし，メディアセンター内外の関係者の方々のご意見を伺いながら，その役割と機能を更に整理していく必要があるだろう。その上で，授業やその他様々なチャネルを通じて，認知を広め，学生たちにとって，最も身近で基礎的な学習支援サービスとなるべく，努力を続けていきたい。

注

1）WRCウェブページ，http://wrc.sfc.keio.ac.jp

2）WRC Twitterアカウント，@sfc_wrc